川柳の雑誌

麻生路郎☆主宰

Pensoj flugas trans la land-limon

Senryu Zasshi

昭和廿二年七月一日第三種郵便物認可
昭和廿四年九月一日發行第四種第八號

（毎月一回一日發行）創刊大正十三年十一月卷二百六十八号

NO.268

SEPT.1949

續川柳講座（22）

麻生路郎

風格のこと

句のそれ〴〵に句品があるやうに、同一作者の句には、一貫した作者の性格が流れてゐて、その作者に対して特に親しみを感じさせられるものであります。そうした特定の作者に附隨した性格を指さして私は作者の風格と称して居ります。

と、云つただけでは充分に理解しにくひかも知れませぬがつまり風格と云うものは、作者の性格から発散する持ち味でありますから、人間の体臭のやうにこびりついて離れない、その人独自の匂ひなのであります。

或はその人の顔のやうなものだとも云へます。大人になつたり、また環境が違つたのですつかり顔貌が変つたやうに自分では思つてゐても、永い間遇はない人に途中で遇つた時に相手方が声をかけることを思うと、どつかにその人らしさが残つてゐるやうに、句にはその人の風格が存在するものであります。

次に解説の便宜上、豆秋のカラーのよく出た句を三十余句抽出して見ました。

降りる客いとのん〴〵とつづくなり
午前二時チップ忘れて帰られる
男らしうやつて居た日にや食へません
返事せぬ夫へオーバ被せかける
極道の傘もささずに帰つて來
手ぶらでは鹿も相手にして呉れず
針金へグザツと名刺さされたり
ただのよな鉢へ毎朝水をやる
いわしいわしなすびなすびの日がつづき
阿呆なこと言うてしもうて淋しけれ
骨立てたまま二次会へついて行く
濕布したままで落選寢てしまひ
秋風の中で乞食に拜れる
火葬場は火をつけてから夕涼
直角に質屋の中へ折れ込んだ
愛犬ボス
けなげにも家主の犬を嚙んで來た
速よいかな消えてしまうと火事見舞
元旦だ一二の三で跳び起きる
むかしむかし稼げば樂になりしとか
出札の穴を覗いてこんにちはすべつたら丁稚にすると励まされ
ちちははにめぐりあひたや靴みがく
あべの橋たれに買はれるうさぎやら
選配でも白粉つけて紅つけて
負けたのも知らないヒマの二三本
ぼろそうに見えるは巡査ばかりなり
十二月うちへ帰るが怖くなり
氣違ひになる一線を支へてる
清和源氏で闇屋にもなれず
やがてこの自轉車も盗られるならん
みの虫のなんぼ匐うても壁だつた
税務署のこんなところに咲く櫻
踊つてる昨夜質うけした服で

以上の一句一句を味読いたしますと、いかにも、のんびりとした句、ユーモラスな句、深酷な句、人情味の句、生活の写生句、強烈な諷刺句、皮肉な句、自嘲の句、人間愛の句、動物愛の句等々々、多種多様な角度から作句されてゐることに、氣づくのであります。そして、それ〴〵の句の可否とは別に、それ等の句を一貫して流れてゐるもののあることを知るのであります。

この作家の場合には、それが人世を達観した飄逸さであると云うことであります。自己の生活が物質に惠ぐまれないとしても、世間がどうであらうと、一切頓著をしないで、のび〴〵と朗らかに暮らしてゐると云う態度が、歴然と顯現されてゐることであります。前掲の

ただのよな鉢へ毎朝水をやる

の句を読みますと、平凡な日常生活をいかにも樂しんでゐるさまが感じられるし、

いわしいわしなすびなすびの日がつづき

のやうな句を詠んでゐても、その貧しい食膳に対して何んの苦痛も感じてゐないことを思はされるし、

むかしむかし稼げば樂になりしとか

と叫んでも、貧しさをすこしもなげいてはいないし、

阿呆なこと言うてしもうて淋しけれ

とは詠んでも、それも云つてしまつたら仕方がないと云う態度しかうかがえないのであります。全く淡々たるものです。貧しさを詠まうが、深酷な事件を詠まうが、彼の句からは一沫のくらさをも感じることが出來ないのであります。

骨立てたまま二次会へついて行く

の句にしましても、骨を立てたと云う不愉快な出來事でありながら、二次会へついて行くと云う、中五、下五の表現で、忽ちユーモラスな人物の飛躍となるのであります。この句など作者自身の体験でないかも知れぬが、豆秋の素で行つたと云う感じのする句であります。

火葬場は火をつけてから夕涼み

男女両性に作用する
プレホルモン
塩野義製薬
皮下注射・錠剤
SHIONOGI

の句にしましても、火葬場で屍体に火をつけると云うことそのものは随分深酷な句として詠まれるのであらうと云う予感を裏切り、下五に夕涼みとつけ、まるでとぼけて見せる作者の態度は全く人世を達観した人でなければ能くなし得ない技巧だと云はねばならないでせう。

從つて彼の社会に対する反抗にしても、反抗そのものを面白く眺めてゐると云う風に見うけられるのであります。

けなげにも家主の犬を噛んで來た

の句にしましても、社会への反抗と云うよりは寧ろ、彼の動物愛の表白の方が強く出て居ります。

「あべの橋たれに買はれるうさぎやら」

の句によつても、彼の動物愛の深さを知ることが出來るでありませう。こゝに挙げた句の一つ一つを解説することは煩に堪えぬので、この位にとどめて置きますが、豆秋の句を通読したならば、右に述べたやうな飄逸味がおのづと浮び上つて來ることが判つていただけたと思ひます。そしてそうした飄逸さが、この作者の風格なのであります。

そして風格と云うものが單に飄逸さに限られた訳でない証左に、今ひとり、丹路の句を左に列挙して彼の風格が奈辺にあるかを検討して見ることにいたしませう。

怒りとはさびしきものをもつものよ

冬の風景を我れより先にゆく男

裾ひいて立てば蠻者の壯麗な春なれば春の姿の令夫人

お嬢さんあなた自身が神秘です

サラリーの日割かんぜうなどすまじ

かなしみ多く夫人は歌をよみならひ

挨拶のうるさき人が向ふからどうする氣かと本箱に問はれ

同じ嘘なら絢爛たる嘘をつけ

存在を無視して上座へ通る足

酒呑まぬ日の五円札ただのさつ

薄情な男いよ〳〵運に乗り

物干へ出て女中さん空を見た

海蒼し蒼し鋭きまで蒼し

妾の子また美しい生れつき

赤ん坊の重みたのしむ日のあらた

死んだふりして蜘蛛よ淋しがらすな

風よ吹け〳〵風の中なるひとりぼち

ひしと抱き寄せるもの子の他になし

私は商人まづ〳〵酌ぎませうけだものの爭ふごとき恋やせむ

花嫁は昔ながらに手をひかれ

いつ果つるともなく朝の靴をはき

一生をかけて会社の椅子にあり

狐と狸以上には出ず君と僕

のご自慢そんな世界もあるのなり

女心の鮎と鰯とどちらせむ

そも〳〵の嘘の始めのゴム乳豆

この作者の句を通読してうける感じは人世に対する一沫の淋しさが一貫して流れてゐることであります。そして何処までも嘘の嫌ひな、眞実探求の性格が反映してゐることであります。これがこの作者の風格であります。

この作者の句には前の作者のやうな飄逸さは微塵も見られません。ある種の諷刺は持つてゐますが、皮肉さは内包してゐません。

挨拶のうるさき人が向ふから

の句にしましても、作者は皮肉の観点から詠出してゐるのでないことが、何んとなく感じられるのであります。この作者は

怒りとはさびしきものをもつものよ

や、

そも〳〵の嘘の始めのゴム乳豆

のやうに、人間心理の探究には他の人々の追随をゆるさない鋭い目を持つて居ることを感じさせられますが、眞実性をつきつめて行くところに、ひとりぽつちと云う感じが、どつかにつき纏うて居ります。

斯うして豆秋、丹路の二作家の作品を対比して見ましても、その作品から醸し出す風格が非常にかけ離れたものであることが知られるでせう。風格と云うものは、その人その人によつて斯くも異なるものであります。そこに作家としての生命があるとも云へます。常に標語に類するやうな句を作つて、それが所謂川柳だと思ひ違ひしてゐる作家によい風格のあらう筈がありません。

多くの作家はその人その人によつて心境も違へば環境も違うので、一人々々が異つた風格を持つものでありますが類似した風格の作家がゐないとは断言出來ません。しかし嚴密な批判の下に置けば類似した風格の作家だと思つても、その心境や教養や環境の相違からどつかに異つたところを発見するものであります例へば豆秋に似た飄逸さはあつても、人間愛に欠けてゐるとか、しんらつさの濃度が強いとか、句の表には飄逸さがあつても、その人の日常生活から來る暗さや蕪雜さが、天衣無縫の飄逸さとなることをさへぎつてゐるとか云う違ひがあるものです。要するに風格は人によつて少しづつ違つてゐるものであります。そこに風格と云うものの面白さがあります。

筆者 Mr.S. Tsukiyama は川柳不朽洞会員であり、川柳ハワイ支部の幹事の一人である。ところが過ぐる日、ハワイの上院議長 Mr. Tsukiyama のゴシップと混線誤報したことから、ハワイタイムス紙上に、左の「同姓受難物語」となつてあらはれた。

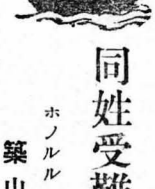
（編輯局）

○

上院議長築山長松氏とは同姓の誼で廿年以上も昵懇の間柄だが、その爲、色々に間違へられるのは、迷惑と申しては甚だ失礼に当るが、時には、うるさく思ふ事もある。

よく外人に『御親戚か』とやられるのはまだいゝ方で、寢室でトロリとした頃に築山違ひの電話がかゝつたり、子供達が学校へ通つて居る時分、屢々アトニー築山の子供さんと間違へられたりしたものだ。

之は先方でも同じ目に会つて居られるかどうか、居られても恐らく僕の方が〝受難〟の程度が多いのではないかと思ふのだが、この



同姓受難物語

ホノルル

築山快夢起

間違ひ同氏の出世の速度に正比例して、段々ヒドクなつて來る樣で此度も同氏が名誉ある上院議長に選ばれたと云ふニュースが日本や大陸の新聞に報ぜられたので大分念入になつて來た。

目下休暇中、華府のフアリントン代議士事務所で下働きをやつて居る次男テッドが來訪の内外人から築山氏令息に間違へられて説明に汗かゝされたり、又数年前東京の一寄つた事のあるらしい青年から長松氏宛の祝辞に同封されて來た僕の次女への手紙には『御尊父の出世をお祝する、就いては小生目下長煩びにて困窮中故勝手乍らこれ〳〵の薬を御送り願へまいか』と依頼が來て、現に娘は之を如何処理していゝか困つてゐる。

「川柳雜誌」上、僕が上院議長に選ばれたニュースなどは間違ひとしても、悪い氣持のしない秀逸の方で、先方が柳誌だけにユーモアの満点、然しこの調子では早く訂正して置かないと、日本の川柳一同から大便あたりで、〝祝快夢起氏布哇上院議長就任〟と書いた桐箱入の上室燒でも送つて來るかも知れない。

議長席取消すまでの誇なり

誤報でも満更でない議長席

川柳塔

麻生路郎

手の染まりそうなすびの紫よ
文藝春秋一冊持つて職がなし
もう秋か裸で咳をしてゐるぞ
くびきりへ今日は秋立つ日なりけり
くびのこともう隣りまで知つてゐる
復員をした顔もせず元の職
轉業をしのぶに邪魔な椅子があり
營業所兼私宅での爪を剪り

○

横浜市　福田山雨楼

ドラ声の共産党を背に聞く
看護婦の和服が匂う暇乞
白髪染めなんかと妻の氣が強し
めしよりもベートーベンを聽くと云う
安樂寺副業のある構えにて

休職拜命（二句）

恩命の身の寢てあれば白い雲
夏の朝働く蟻が羨まし

池田市　戸田古方

病氣にもちと税金がかゝるなり
日本語だけは忘れず帰つて來
冗談のおごる話はきゝ流し
京女みるたのしみも京の旅
責任になると言葉があらたまり

布哇　内藤草一郎

指切りをした夜もあつた指を見る
情緒がどうのこうのと呑む話
年上の女の愛のこそばゆく
何をどう見たかくすりと遠眼鏡
靴をぬぎハハアー今夜はカレーだな
怒らして仕舞つて貸はそれつきり
親はバス子は自動車で御出勤
肉の血のたれる包を立話し
姐も窪み妻の手しわがより

尼崎市　水谷鮎美

白浜温泉（三句）

胸の辺に白良の風の吹けよふけ
酒をのむ灯に浜木綿のこちらむき
朝の海女ひとりへ蟹が匍ひ

平塚市　木村孤浪

夕涼み西瓜と云うものあつたげな
丑の日の夕餉一串ゆづり合ひ
日曜の大雨親をホツとさせ
ロケットをベビーにもさせサングラス
役得はとかく慌てゝしまひ込み
ほうそうの跡何のその暑いこと

某駅にて　大牟田市　高田抱逸

引揚げの渦へ花輪は卷込まれ
重役になる氣養子を引受ける
引揚を馬賊の顔で出迎へる

大阪市　市場沒食子

世は移る避姙の文字のそこかしこ
すり減つて良夫喰ふだけさえ出來ず
もとルンペン此頃ゴミの車引く
名が賣れて來て金錢に事を欠き
切り出せば醉うてなはると押へられ
そも父母のどちらに似たか氣がちさし
新世帶ながらも継のものを干し
樂な証拠にされて怒つた無欠勤
子が泣いているのに妻のスロートモー
五目すし祇園ばやしを遠くきく
おいらくの恋がダンスを習らい初め
一錢の要る配給をおかしがり

祝古橋君外五選手渡米

よき友とロ市の水溜君を待つ
君の夢太平洋もせまからん

大阪市　須崎豆秋

金歯でも拔こうかといふところまで
大時計小時計時報に合はして寢
裸一貫ならこそ思ふことが言へ
暑うても猫はキャンデーとも言はず

大阪市　正本水客

奥様は八百屋なんかがしてみたし
ピアノいま姑さんを寄せつけず
ピンポンが上手女中をやめて嫁き
年下の男の煙草卷いてやる
前金でおんな不敵な取引し
叱られる恰好がつかぬ半ズボン
頭をあげ給え人は悲しむべく創られた
お別れを云いに來たのに傘借りて
半ズボン尋ねあぐんだ地図を出し
そろばんで行政整理はじかれる
首を切る方も一個の労働者
婚期すこし過ぎて謠を習い出し
旅にいて旅の心を大事がり
処女すてた朝の時計のねじを卷く
旅ひとり心の底まで雨にぬらして

名古屋市　吉田水車

酒をつぐことさえ娘恐ろしく
ひと様の女と歩く星あかり
あんなひと嫌ひと言わぬ歳になり
百燭の下でとのひすぎた嫁
吾が馬鹿を笑へば山もこだまする

神戸市　竹内潮花

奈良縣　尾崎方　正

白持つた方がいさゝか痩せている
尋ぬれば起きたばかりの新世帶
晴耕雨読それから妻をいたわる氣
洋裁へ種痘の痕がもの淋し
へに結ぶ口へしつこくねだられる
こらへ〳〵て駅のベンチで醉つぶれ
しなだれかゝつて愛を滿喫し

大阪市　菊沢小松園

生活のゆとりがさした離婚沙汰
鐘還る鐘楼となつて月に冴え
山崩れ此処にも稼ぐ人があり
主婦としてあゝ薄暗き台所
氣の多さ謠尺八唄ダンス
制限の藥もあるに又生れ

姫路市　夷一笑

雷が擬音めいてる眞晝の夢
とんち教室四五人居れどばつとせず
盗難はよんべの暑さから話し
涼しさにあしたの糧を忘れ居し

大阪市　木下幽王

情緒ゆたかに〳〵岐阜ちようちん灯る
病こうもう医者も知らない藥が並ぶ
花を愛す今日の儲を考へ乍ら
キリギリスだけが生てる晝下り
ふるさとの草の匂の強烈さ
とんぼ大阪で生れて非業な最後

大阪市　橋本美奈子

染直し着て故郷の夏まつり
見渡すかぎり青田の一人旅
電柱の工夫妻子を持つ身にて
出戻りの姉轉々と居をうつし

出雲市　尼綠之助

首相官邸にて
大臣の答弁闘爭的にきく
官邸を歩く大臣の眞似もして

皇居拜觀

南瓜・ヒマ・甘藷宮城の燒跡よ

島根縣共產党ヤミ事件

言ひ訳も心得てゐる声明書
わからない話引揚船を降りて來ず

奇勝立久惠にて

吊橋にいさゝか醉うた歩きよう

大阪市　水谷竹荘

一生を夜の女で暮せまい
ふところの金が盛り場歩かせる
病名が知れて見舞に來てくれず
エプロンのまゝで書いてる主婦日記
噂などどうでもいゝの好きは好き
なるようにしかならないとふてくされ
未亡人强く生きます舞扇
首切の話やつぱり寒う聞く
頑固ではないよ思想が違ふだけ

八代市　佐野卜占

役目ですにくまれ口も時にきゝ
ニュールツク市電の中ですられてた
早く死んだ友をうらやむ氣にもなり

兵庫縣　小沢史葉

ビヤホール父と出かけた日曜日
親の氣も知らず酸素の泡をたて
惡夢まだ祖國の港まで続き

神戸市　大鶴喜由

優等賞誰も氣づかぬカンニング
産ませ老けさせばゞが〳〵と
眞似て買い眞似て拂へぬ女氣の
夫への笑みはちよつぴり眼が下り
そばに誰かいるなり電話標準語
妻の氣の立つ日の子供あわれなり
鬼ごつこ性の芽はえは坐りこみ

大阪市　吉田斜水

ビヤホール九原則を論じ合い
フト金魚想ひ出させる処女の唇
人みしり親の氣持も知らないで

吹田市　野本呑水

公職の次は此の世も追はれる身
生きのびた古稀へ女の孫ばかり
歯ブラシを二人で使う旅の朝
同權を考へもせず世帶じみ
久濶は小額切手で貼つて來た

布施市　糸本醉月

赤旗へ心の動く世相にや
落ちぶれた旦那赤旗愛読者

奈良縣　白牛奇朗

デザイナーあちら名前でよく流行り
夏やせがはつきり分る腕時計
向ふから來た絵日傘を潜らされ
コロッケが丁度四ツで足る夫婦
科学的説明もするふくらし屋

大阪市　好崎申仙

ABC父兄の頭古いなり

岡山縣　山分北路

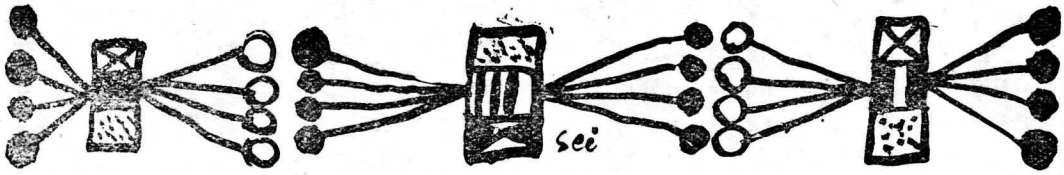
教育くじ子は大学へ通はす氣
のろけにもならない傷で審判所
砂浜に女眞夏の色で來る
目隱しの手をそのまゝであまえてみ
恋と來た青い山脈海が見え
八月え膝もくずさぬ姉の客
列車事故妻はしやがんで待つてゐる

大阪市　渡辺孫拙

幽靈は時代の相を戯曲にし

奈良縣　西辻竹青

買出でないと言ふ様な花を持ち



療養か貴族の様な暮し様
落伍する輩も名士の見捨てざる
冷酷な浮世を他所にお茶お花
生き抜くに試練の様な暴風雨
警棒も鞄に挾み出勤か

山口縣　長野井蛙

幸福はどの子の希望も聽いて醉ひ
札ビラを切つて明日の遺書を持ち

京都府　間島青丹子

同窓会をリードしているニユールツク
落ちる丈落ちて夫婦の仲がよし
押賣りへ女ミシンを踏みつゞけ
横文字を入れて名物賣り出され
インターナショナル女の夢はこわされる

名古屋市　山林正思

色あせた今も廿歳の服を着て
首切らす給與も吳れず何うする氣
未亡人若き燕も生きん爲め

布施市　森下愛論

妻と子と居て平凡な日を愛す
夢を追ふ女に風の強すぎる
見合なら髭をば剃つてくるのんに
金と暇なくとも二号ほしいなり
同権を主張もせずに妻詫びる
言わんでもいゝこと云うてりんきされ

長男聖一誕生

少々は泣け〳〵連動するものぞ
とりまいてやれ欠伸したのびをした
誰に似るかと行末をもう案じ

大阪市　太田良子

おこられて見てもやつぱり夫婦です
今やつと二人になれた坐り様
有難うと云へる夫婦で五十過ぎ
たま〳〵に貰ろたお菓子でもてなした
一人來る所でないを知つてゐる
ステップも踏めない様な医者で生き
白い飯ばかりの中で箸をとり

尼崎市　靜岡忠八

來客のたびに疊が恥かしく
二号など持つ精力を羨まれ
二日醉い妻わはたきを強くかけ
啄木の歌を夜汽車で思ひ出し
再建を誓ふ同志の太い眉

大阪市　松江・梅里

首きりの腹癒せをする列車事故
盗みする子に溫き握り飯

大阪市　伊藤定美

でたらめな恋へ女は泣きませぬ
ちとよたな男の足へ女下駄
電話口声聞くだけの恋になり

岡山縣　丸山弓削平

急に部屋閉めたら彼女がギョッとした
拒んだら恥辱に死なう女の眸
兜虫金銀の馬車ひかせ度し
こゝまでが裸体でないと云ふ水着
政令と女の髪と猫の眼と
末恐ろしや留守の間の子の化粧
肉体に負け不貞の妻に負け
後めたさが老らくの恋の歌

岡山縣　直原七面山

失はれた青春悔む柄でなし
時々は緋の寢卷でも着て見せろ
大川に出されて金魚よう生きず
未亡人心の扉半ば開け
四十の夢は女を撫で切りに
顔でなく肉体に惚れる年になり
女皆娼婦に見える程に醉ひ
刑務所の庭にも櫻咲きは咲き
此の酒で職追はれたは二昔
看護婦に望みをかけて生き伸びる
夫婦箸二人で使ふ日が待たれ

岡山縣　黒田笑泉

御調子に乘せて書かせた寄附の高
遲返りヒスと云ふ術が待つて居り
御隣りの不幸へラヂオきつておき

宇部市　上林粗影

平和とは綠の丘に飯の味
倉庫の鍵明日を知らずにダラリ
勧誘員の膝に愛猫眠りこけ
あな淋し神主さんの馬鈴薯掘り
姑の手紙に助言する樂しさ
恋愛の日記空白のまゝなりき
古壺や声なき声を聞かんとす

大阪市　橋本綠雨

電話では話が出來ず靴を履き
勤めから戻る娘の太い足
働らいた金よと言えぬ金かられ
雨の宿山を眺めるばかり也
白粉をつけて元氣をとりもどし

仮名づかいその他

堀口塊人

Tとかlとかを仮名で書く場合、何とか一字にしたら、大へん便利だと思ふ。又、きようとか、によう、とかも一字に表現されたら都合がよろしからう。然るに弘法大師以來の四十八字にしばられて、相不変、かなづかいに浮身をやつして居るのが、日本文化の現狀である。何故、制限とか統一とかいふ事のみを強調して、創造と自由を忘れて居るのであらうか。創字こそ、文字を使用するものゝ自由ではないか。

今度の新仮名づかいには新聞社がいち早く賛同したのでこれで何もかもかたづいた樣に考へて居る連中も多いらしいが、「いしやが」医者か、石屋であるかは、勿論のこと「にちよう」は日曜か二町かそんな区別すらつけ得ない文字を完全であるかのやうに考へて居るとしたら、驚くべき文化的盲目といふべきであろう。

むかし〳〵、仮名づかいの先生方が集つて、神戸高等商業学校と仮名で書いてみたところが、一人も正確に出來た人がなかつたといふ。太郎はたろ、か、たろー、か、たらう、か、たろう、か、いやはや、まことにやゝこしい事である。明治以來の國定教科書なるものをひもといてみるがよい。それ〴〵の時代にそれ〴〵の仮名づかいが使用せられ、その何れもが、正しいと主張せられて居た事を発見するであらう。終戦後「仮名づかいは発音に從ふ」といふことが文部省あたりで提唱せられ新聞社あたりもこれを採用するや、時局便乘については抜目のない連中は、たちまちこれに賛同したのであるが、一部作家の反撃に遭つて足ぶみをして居る。これはどうしたものであらうか。

詩人は自由に着想し自由に表現する。表現の自由のためには文字を自由に使用する。新仮名づかいが、自己の感情を盛るにふさわしいかどうかは詩人自ら決定すべき問題であつて他から強制されたり統制されたりすべき問題ではない。詩人とは言葉を文字を創作する人間である。

川柳家とは批判精神に富む詩人であると思ふ。その批判精神を忘れて、ともすれば当局の尻馬に乘る傾向のあるのはこまつたものだ。本当の話私は新仮名づかいに賛成なのである。ところが文章を書く場合に、一々そんな事を考へて居るのは邪魔くさいので、ついそのまゝになつてしまふわけである。そして私はじやまくさい事や面倒くさい事が大きらいな無性者なのであるだから、こゝで問題にしたいのは、仮名づかいの事ではなく、官廳が決めたのだから何でもかんでもそれに從ふといふ、無批判性、なのである。これについては徹底的に論じたいがこれ亦じやまくさいから、面白い実例だけを書いておく。

文字の左横書は、誰が決めたのか知らないが、いつの間にかそれになつてしまつた。昔小川某といふ鉄道大臣があつて、せつかくの駅名の左横書を右書に改悪した歴史もあつたけれども、今ではほとんど左になり、額の文字か日本銀行券だけに右書が残る事となつた。

言文一致体は誰も奬励しないのに、民間ではほとんどそれになつてしまひ、たゞ勅語や法律や官廳関係の文書にのみ文語体を使用して居たが、それもいつしか文部省の御手数をかけずに言文一致体になつてしまつた。民主々義といふのはこんな風でなければいけないと思ふ。これとは別に私は文語体が好きであり、大町桂月や横山健堂は今でも愛読して居るし、里見敦の「ムス武異聞」なんかは好きな文章の一つである。

右の二つの例に反して、どうしても行はれないのは算盤の四ツ玉である。理論的には四ツ玉がよいにきまつて居るのであるが、じつさいにはどうしても五ツ玉を捨てる事が出來ない。若し法律で四ツ玉を強制したら、日本の事務能率は、一時非常に低下する事であらう。五ツ玉は盲腸の如きものかもしれない。

これよりもさらに根強く民間に行はれて居るのは太陰暦（旧暦）である。明治五年太陽暦即ち新暦となり、法律を以つて太陰暦の出版を禁止してから一世紀に近い歳月を経て尙旧暦が捨てきれないのはどうしたわけであろう。旧正月は農閑期である。旧盆には田草取の心配もあるまい。太陽暦はよろしいが、こうした民間の傳習まで新暦にしたところに無理があつたのである。

わるい事は改められなければならない。併し、それがわるい事だと決定する迄には、相当の期間を待つた方がよいようである。

麻生路郎著　水武書房版

好評嘖々

川柳を研究したい人にも指導する人にも好適の書

本書は著者が多年のウンチクを傾けて執筆しただけに川柳の新指導書としては唯一無二のものである。「川柳とはどんなものか」から説き起して收むるところ三十七講、平明で親切で、初心者は本書を繙くことによつて直ちに川柳作句のコツを会得することが出來る。多年川柳してゐる人たちにとつても又好参考書である。敢て一読を薦む。

B6版　二一二頁　定價一〇〇円　送料　金四二円

取次御注文は　大阪市住吉區万代西五丁目二五番地　振替口座大阪七五〇五〇　川柳雜誌社

近代文学と柳川のてし

戸田古方

(一) はじめに

すぐれたものには宣傳がいらないといい、又すぐれたものだから宣傳がいるのだともゆう。いづれも眞理である。私は川柳を愛する、それだけ溺愛の危險をも感ずる。この一文を通して、川柳の本質を反省してみたい、反省を通して内には自らのより深い愛情を、外には共鳴者を見出すことが出來ると信じる。

(二) 文學史に於ける近代文學

近代の出発はルネッサンスだといわれている。ギリシヤ●ローマの文明は五世紀に於ける西ローマの滅亡によつてひとたび地におち、爾來一千年の間暗黑時代となり、その間に新らしい西洋文明の主人公ゲルマン人がキリスト教と封建制度のなかから新らしい文明を徐々にきづきあげていつた。十字軍による外國文明の接触と、商業交通の発達はゲルマン人のヨーロッパを幕開く黎明であり、こゝに文藝復興ルネッサンスがはじまることになつた。

類型的で、超現実的で、韻文で、素朴であつた古代文学をそのまゝうけつぎ、それに宗教の窮屈さと、封建的傳統の枠を以つて繋りつけた中世文学はルネッサンスに至るまで、ほとんどみるべきものをもたなかつた。

したがつて、そのあとに現われた近代文学は、近代史がそうであつた如く、革新的性格をもつている。そして現代人のこころに直接のつながりを持ち、又さらに、廣いことばをもつていえば現代思想、文学の出発点であつたのである。

(三) 近代文學の特長

一、批判性　文学は報告でも記録でもなく、思想があり、主観のあることはゆうをまたないところであるが、近代の特長である自由、民主の立場から封建を克服し、よりよき人生のための改造に一役買つた。そのために批判性が強くあらわれている。

二、庶民性　文学は少数の特権階級のもちものから解放された。中世には出來なかつた読書の機会に惠まれたこと。これには文学が大衆のことばでかゝれたのと、印刷術の普及が助力している。

三、個別性　誰にでもわかるものがかゝれ出したと同時に人間尊重のヒューマニズムの思想は個性の自覚をうながす。したがつて作品にも個性がはつきり出るようになる。

四、普遍性　ひとりよがりの個性では大衆の支持はない。個性が、尙ばれるとともに普遍性の限界も又考えられることである。

五、複雜性　思想に浪漫主義あり、写実主義あり、又それに象徴主義も加わる。表現の上にも、修辞の上にも、古代中世にみられなかつたいろいろの形式があらわれる。藝術の絶対的尊嚴を守ろうとするもの、功利的、目的的に藝術を利用しようとするもの、功利的も必ずしも不純なものではない批判精神もまた之に属するからである。

以上列挙したように五項目があげられる。

(四) 川柳の系譜

これは川柳成立の歴史である。川柳は徳川中期、江戸市井人柄井八右衞門によつてはじめられた人生詩であり、大衆詩である。享保末年から寛政にいたる間が八右衞門の在世期であつた。

徳川時代は今まで文化をもち得なかつた町人が抬頭し、絵画には浮世絵を、演劇には近松の淨るりや歌舞伎を持つていたのである。浮世絵が大和絵や水墨画のあとにつゞいた如く、又舞樂、演能が歌舞伎に変化した如く、川柳にも一脈の系譜をもつている。

その流れを溯れば往時の歌問答に起源を発する。古事記にのつている酒折宮に於ける傳説に出てくる、日本武尊の「新治（ニイバリ）筑波すぎて、幾夜か寢つる」に対して火焚翁の「かかなべて、夜には九夜日には十日を」と返歌したのに端を発し、後三年の役の源義家の「衣のたてはほころびにけり」といゆう下の句に、阿倍の貞任のつけた「年をへし糸のみだれの苦しさに」の上の句はあまりにも有名な逸話である。

こうした、連詠による短歌の吟詠形式は、万葉、古今等の歌の本道とゝもに発達し、足利時代には連歌を発達させた。連歌は俳諧、連句となり徳川時代に入つた。

連句の第一句を発句といいこれが独立して俳句となつたが、一方その頃、江戸雜俳中に前句附とゆう一つの詩型が流行した。この前句附のうち下句なく独立して句体をなすものが集成されて、俳風柳多留となつた。

前句附とゆうのは、下の句で題が出されて、それに上の句をつけるのである。

「切りたくもあき、切りたくもなし」

とゆう題に対して

「盗人をとらへてみれば我が子なり」

など附句された。これなど上句だけで充分意味を通じ、人情味もたつぷり、ヂレンマもアイロニーもある、柳多留はこうした句から出來ている。

詩としての川柳の名は、前句附の選者、当時之を点者といつたが、川柳柄井八右衞門の雅号をそのまゝ川柳点として普及され、後、單に川柳とゆうようになつた、一選者の固有名詞が詩型として普通名詞になつたことは他に例をみない稀らしいことであつた。

（川柳雜誌二五九、二六〇、福田山雨楼氏「川柳語源考」参照）

先祖に短歌をもち、兄弟に俳句をもつているとゆうのが川柳の短詩型文学に於ける位置である。

俳句と川柳とはともに上下をぬいだ市井人の詩であるが川柳の方により一層大衆性があり、作家にも鑑賞家側にも学歴、地位、階級を超えた庶民性をもつている。

（五）日本文學に於ける川柳の地位

川柳の地位を考える前に、川柳が文学の仲間に入るかどうか吟味してみる必要がある「川柳雑誌」一月号に於て宇井氏が、同五月号に石原氏が少くともこのまゝでは非詩であると論じていられる。だが私は私見を開陳して、批判をまつのである。

川柳が詩であるかどうかを考える前に、詩とは何ぞやの問題がさきに來る、私は次の如く考える。

詩とは何ぞやは又藝術は何ぞやに通じる。所詮は人間の感情生活につながりをもつ。喜怒哀樂をごまかさず直視した時に詩が生れる。いつはりなき心のはたらきは眞につながり、美につながり、善につながり、聖、即ち宗教につながる。眞の詩人が、科学者が政治家が、そして宗教家が生れ、地上即天國と化する。

詩に於て喜怒哀樂の刺激を與えるものは自然である場合もあろうし、又人間である場合もある。それによつて生ずる自然詩俳句、人生詩川柳の区別はむしろ第二義的なものである。

詩に対するか様な見方は偏見であろうか。

喜怒哀樂を出発とする最終点は知情意の調和である。かくして詩は聖に通じ、川柳又宗教への門である。

川柳が最も喜怒哀樂に関係深い所に位置していることを考えれば、川柳が詩であることの問題は解決する。

前提の吟味解明がすんだから次に本題の日本文学に於ける川柳の地位に論議をすゝめよう。

先ず川柳を外からながめている人の多くが下品な低俗なものと考えていることである。この場合必ず引合いに出されるものは俳句であつて、俳句は上品だが、川柳は下品だとゆうことである。自然詩なるが故に上品で、人生詩なるが故に下品とゆうことは理由としてはおかしなものである。自ら人間を下品だとしてしまつている。だがこれには作家自身、負うべき責任を全くもつていなかつたわけでもない。がこれは本質的な問題ではないのである。

更にいえば平言俗語の使用を拒ばない川柳の特長が、表現の露骨と相関連して來る誤解であるにすぎない。むしろ俳句のもつ自然詩的性格は日本の季感に制約されて國際性のとぼしいものになり得る欠点すらもつている。フランスやアメリカで俳諧的詩があるそうだが、それは俳句的であるよりも著るしく川柳的であるときくが、うなづけるところである。

こうした普遍的な内容は上位の階級より、最下位の階級に親まれ、作家もそうした階級の人々から多く出たのである。階級を超えた、士民の交流すらもち得ない程、下に親しまれたのであつた。

しかしほんとうの所は柳多留初扁以來、作家名が公表せられず、はたして交流の眞僞を論ずる根拠をもたないのである。個人の詩より階級の詩の如くにも思われる。

こう考えてくると川柳の下品、低俗の理由がやゝあきらかになるとゝもに、その中から幾多の秀句を拾い出せることからしても、川柳非詩の論が全面的に肯定されがたいのである。

次節近代性で明かにされるところであるが川柳の地位は日本文学に於て決して低いところにのみあつたものとはいえない。

（六）川柳に於ける近代性

さきに列挙した近代文学の特性へ句例をあてはめてみることにする。

一、**批判性**

こんな傷ぐらいに指はなかりけり　沐天

機械一台この一軒が喰いはぐれ　路郎

人と鰯は油ひたゝれり　不詳

人生批判にいたつては人生詩である全ての川柳がそれにあてはまる。こうした社会批判は古川柳にもある。

役人の子はにぎにぎをよくおぼえ

二、**庶民性**　柳多留のどの頁をひらいても、裏店の態さん八つあんの生活がにじみ出ている。用語はしかも時代の俗語が、地方の方言がそのまゝである。

又川柳句集の分類されたものをみるならばその見出しの項目には金とか、商賣とか、男とか女とか、老人とか子供とか、けだし川柳なればこそ「人の一代」の句集も大した苦労なしに編集出來るのであつて、その人物階級も

火且那一人へ暮の風呂がわき　錦魚

輝くやもとより金に嫁せし身　劍花坊

の玄関に位い負けせぬように立ち　福造

とゆうような上流から

貧しさは時に罪なき子をしかり　鉢朗

怨念を質屋かまわず藏に入れ　乱三

以上の句によつてわかるように、いい身分を取扱つた場合でも、よくないくらし、貧しい大衆の叫びを通していい身分にふれているのである。

川柳はやはり庶民の味方であるといえるのであつて、貴族の独占物であつた古今集や新古今集の高踏とはるかにちがつた、名もなき辺境の一野人の詠草を集めた万葉集にその共鳴者を見出したともいえよう。

三、**個別性**　川柳雑誌社以外にあまり馴染がうすいので、実例を狭い範囲に止めることを許していただきたい。

所謂苦労人須崎豆秋氏

むかしむかし稼げば樂になりしとか

教育楽器はヤマハ
日本楽器
南区心斎橋筋二丁目ノ一
電話 南 ㊱ 3413 番

近作柳樽

原子力人の無力をあざわらふ　大阪府きはち　同
三味線も時代の流知つた音　同
麻痺してる心にスリル又求め　同
失望が赤い夕日に立ちつくし　同
金借りに來たなと犬も吠え立てる　同
喧嘩する度にあなたが好きになる　同
都々逸は下手だが酒はいける口　同
ニューフエースその肉体を賣立てる　同
すぐ泣ける涙女の恐しさしる　同
初恋はハイネ詩集を語り合ひ　同
半ズボンおえら方には成れぬたち　尼崎市聽松
水盤にわづかな涼味とるばかり　同
食慾不進かくして人は死ぬならん　同
よく見れば蚊にも最後の悶えあり　同
仲よしの二人が二人不良にて　同
仲よしの二人に酒が高過ぎる　同
西側の涼みに妻の出にくがり　同
子を叱る俺の心が歪んでた　同
今以て氏神様も仮住居　同
食へぬ者は食へぬ首相は避暑をする　大阪市草々
共産党になろうかと無茶な秘以來　同
中元え賣れぬ光を箱に入れ　同
夏の子にアヒルの水を荒らされる　同
アカハタの唄前進座幕となり　同
鍼力屋のまた赤ちゃんを起す音　同
産着縫ふ妻を夕刊越しに見る　同
落魄れた実家にひがむ事があり　尼崎市ちか子
たまに來る実家彡がまゝして見たし　同
両親が死んで実家の味家なさ　同
実家実家少女時代のなつかしさ　同
実家には今もやつぱり猫が居る　同
たまに來た実家で嫁とつかみ合ひ　同
針仕事きようのお客の多いこと　同
コンパクトで睡氣を拂ふ女事務　大阪市花村
アルバイト不満は親に当つて來　同
赤い爪ホテルの蚤を追ひ廻し　同
交代が近づき巡査箒持ち　同
アルバイトやつぱり月謝滯納し　同
あの頃は皆生きてゐた夢の中　同
そうめんに似た雨降らす夏舞台　同
末端は末端どうし酌交し　兵庫縣齊花
喰ふ事の弱さ啖呵もよう切らず　同
凧糸のわくにも死んだ子の名前　同
押花も肘突ももう遠い過去　同
乾パンの堅いばかりの俺だつた　同
整理案以來サービスする役所　今治市文庫
契約書但しでがんじがらめなり　同
藝術として乳の線腰の線　同
唯我独尊を筋金入りとは潜越な　同
ヒロポンで一歩進めて二歩おくれ　同
まだ家で蔭膳据えてゐると聞き　貝塚市庸司
親子とはいゝなネヅミの親子でも　同
子を叱り過ぎて煙草のほろにがし　同
榮轉の先は猪なぞも住み　同

シベリヤ復員再開

いゝ色にありましたと戻して來　同
抑留で覚えた唄を子に聞かせ　貝塚市千舟
癒らねばならぬ氷を胸に抱き　同
いつぺん代つたろかと見舞に來　同
石段の下から拜む病上り　同
アカハタのカンパに蛍雪起される　同
ベートウベン母の居眠りこけかゝり　小松市茶佛
婚礼へ日は市長でない市長　同

どろぼうと思うて汽車の連れになり　お香

この匂もしてる折鞄

生え抜きの島の内人高橋かほる氏

たばこぼんつんぼの前に一つあり

ドレスきてやつぱり容子して走り

路郎先生のよき指導によつて門下のわれわれは句主の名をきかないでも句主をいい当て得る程自分の匂いのする句を作ることが出來る。句の巧拙より個性、「どんぐりをいくらならべても仕方がない、はじめは少し位拙くとも、どんぐりの外に柿も栗も用意してこそ面白いのだ」と先生はおつしやる。鮎美氏には鮎美氏の、潮花氏には潮花氏のカラーがある。

四、普遍性　「いのちある句を創れ」先生のモットーであり、社のモットーである。にもかゝわらずしばしば現われるものに難句がある。難句には時代によるものと、場所によるものと、もつとひろく全般的にひとりよがりの難句がある。所謂ひとりよがりの句は句として價値の低いものが多い。

しかし前書によつて傳えらるべき佳句となるものがある。昭和九年の風水害と前書した次の句は有名である。

大毎もとまり　豆腐屋もとまり　豆秋

難句は時事吟といわれるものに多い、古いところで

鎌倉にいないとことがむつかしい

この句で鎌倉が何を意味しているかを知らなければ何のことやらわからない。封建治下離婚の自由をもたない女のための、安全弁縁切寺のある場所を鎌倉をさしているのである。こんなことから難句の解明によつて風俗史の資料にする学者があるがこれは詩の問題とは別なことである。

現代句にも

つり竿がさわる「る」号の運轉手

「る」号とは築港行の市電の運轉系統である。

金言を中にかこんだ板囲ひ

金言は仁丹の金言容器の金言である。つまり仁丹の廣告である。最近の闇の句に

網棚にアララ醤油がもれており　博也

これは文藝賞を擬せられた佳句である。

場所による難句の一例として

さくまようせんとあかんと蛙　路郎

切

蛙切りとは伊賀地方の水呑百性だと註がついている。

「二等後家」とかゆう特殊なことばがハワイの川柳家によつて紹介されたことがある。又吉原や歌舞伎の世界は古川柳の独壇場であるがその中にはずい分難句がある。

川柳にこうした難句の生れるのは川柳の作句に何等拘束

良心があるかとお役人の無理　同
良心と別に申告する所得　同
二十八遲いでんなと他人樣　大阪市葉榮子
あくせくと後妻になつた三十過ぎ　同
けしの花白いベットに赤く燃え　同
養生が大事でんなと開業医　同
青酸加里が身近にありて人恋ふる　兵庫縣白鬼
人も旗も人民廣場の歌に醉ひ　同
寐間煙草こんな女に誰がした　同
邪恋とや言われ二人は河鹿聞く　同
氣をもませつゝ青春は矢の如く　熊本縣室久
社の電話又嬶曳の女事務　同
ゆづられた席へ終点見へて來る　同
融通が利かぬ番頭が居つて無事　同
未亡人夫の力を土に見る　大阪市文雄
大掃除一疊の畳の喜びよ　同
貧しき日学者も商賣してみよう　同
アスファルト逃げるこ蟹へ母と子ら　同
美粧院舗道にうれしい靴も鳴り　鹿兒島華水

ソ驟引揚再開

留守家族船出のドラをふし拜み　同
あの頃の帶をば賣るにさびしがり　同
うつちやりを食つても女にくからず　滋賀縣美秋
嫁くまでは遊ばしといてと手におえず　同
ラブシーンがすめば隣も席を立ち　同
さよならを言わせに抱いて送り出し　香川縣迷觀子
旗の波思へば今日を知らずして　同
再婚を聞こうともせず子と遊ぶ　同
子の喧嘩反目したまゝ蚊帳に入る　宇部市金路郎
関係の無いストへ朝寢つゞくなり　同
見拔かれて闇商人の苦笑い　同
豚やつと肥えた頃には値が下がり　今治市一風
勞組のビラから略字覚えて來　同
腋の毛を見せて先生叩きに來　同
炎天の街道行くは闇屋なり　今治市松花
買え買え文け成行で買う金詰り　同
お手製の水着あわれやすけて見え　同
魂のこと忘れてた五六年　高知縣元馬
親讓り唱歌は下手な子に生れ　同
神樣の営みと知る茄子の色　同
大きくなれば判つてくると逃げておき　鳥取市日満子
何日休むと医者に聞かれてまごついた　同
おもちやまでの祇言ひ足らぬ迷子札　同
こう言へばあゝいう娘にして了い　東京都万年
感激も消えて復員職探し　同
駅皆んな馘首を逃がれた顏の色　同
歩く愉しさ仔猫ひよろ〳〵して歩く　大阪市葉光
シャツ一枚で働く家根に風があり　同
饒舌の主婦に母あり小半日　同
おどかそうとする足音へ針をとめ　岡山縣茶々
お目鏡にかない化粧も薄くゐる　同
蚊帳つれば我が城郭の氣持して　同
吸殼で妻概算を彈いてる　熊本縣斗四翁
籔でもと言ふ氣になつた子沢山　同
会葬のついでに古い扇子捨て　同
半ズボン案外細い毛臑なり　堺市太路
御秘藏の屏風へ祇園囃子聞く　同
御條の客も同じ京言葉　同
肉にいく箸が遠慮でぐをはさみ　兵庫縣無聖
むかしむかし聖者は笑わぬものらしい　同
窓々手々顏々眼々引揚列車　同
病床へリンゴ使命を全うし　大阪市美水
卓上のリンゴへ白百合匂ふ部屋　同
純愛はリンゴの味のそれに似て　同
一人づつ抱いても余る子を降し　富山縣三峯
腹膜がオールドミスの最後なり　同
不信の子等に犬は逃げ犬は逃げ　同

がないとゆうことにも原因していよう。川柳の限界については次章にふれたいと思う。とにかく句集にその句をとゞめている大部分は日本人に共鳴者のあるは勿論多分に國際性をもつていることを承知すべきであろう。

五、**複雜性**　川柳は遊びではない、よりよき人生のために献ずるものである。それをしも功利性とゆうならば又何をかいわんやである。川柳は社会批判人生批判をするが批判のための批判をするのではない。よりよき人生のための批判である。川柳は又あらゆる啓蒙運動にその意味で助力をあたえることが出來る。

又感じの句の句主もあればうがちの句の句主もあり、ローマンチストもいればリアリストもいる。それが何の制肘もうけずに共存しているのが川柳の世界である。

七、川柳の反省

仕舞風呂一本足が飛んでくる　大門

「これが川柳ですと」私がよく引合にだす好きな句である。

私はこの句を通して、川柳が詩であるかどうか論ずる必要をみとめない。詩である以上、それは單なる説明であつてはならず、描写でなければなるまい。東洋藝術独特の余韻、余情が描写によつて生かされる。そこに川柳の特性が生きてくるのである。

さて「仕舞風呂」の句であるが、「仕舞風呂」と一本足の不具者と組合せる、そこへ「とんでくる」とゆう眼に見るような描写によつて、ベリース以上の深刻さをうつたえる。そこにある穿ちは單なる理性でも説明でもない。

穿ちは感性より理性の世界のものである。しかし人生は夢だけでなく、きびしい現実から逃避出來るものではない。そこに知情意の調和が要求され、人生詩にあらわされる矛盾の滑稽味もあるとゆうものである。川柳のねらひはこゝにあり。近代劇の境地でもある。

「仕舞風呂」の句はこの全て

ニキビ
にきびとり美顏水
桃谷順天館

見るだけの夜店と子供は知つてゐり　香川縣朝　兒
うちの娘へラヴレターらしいのが届き　同
嫂の不緻量なのが良い噂　愛知縣吐　平
時間的に氣分の変る社長です　同
親子して醉へば親子のよさ思ふ　愛媛縣旭　童
馬鹿になりきれぬ弱さの腹をたて　同
飲ませれば話の分る人にされ　佐賀縣えいを
ルージュなほ好みがあつて春の逝く　同
何の木か知らねど並木みどりなり　金沢市陽　々
新作のなんのかんのと盆踊り　同
お化粧の薄いを娘見込まれる　岡山縣満　年
自信だけ強くて女行きおくれ　同
勉強をせぬはグロヴが新らしい　熊本縣清　秋
仲人は應援弁士に似て喋り　同
職業に貴賤はないが馬車曳きさ　大牟田風　浪
レディファーストパン〳〵が先にたち　同
買手來ぬ夜店は笛を吹いて見る　岡山縣美　鶴
薄情な男へ涙見せぬ意地　同
法律がどうのこうのと孫と祖母　鳥取市秋　男
ハンサムを連れた女の水着紅　同
腹立てた物干に雲ひくゝ來る　大阪市五　馬
母若し姫鏡台の化粧品　同
疊糸まですり切つて皆元氣　岡山縣富　至
追従も弔詞となれば美くしい　同
郷愁の心と虫がもつれあい　愛媛縣孤　峰
麦を刈る父の姿が世に疲れ　同
眞珠より海士の姿が氣にかゝり　兵庫縣尋　四
ウインドの前で押合ふ俄雨　同
雨止ます女も幽霊話する　三原市正　一
影の方が俺なのか日々ものう過ぎ　同
雨洩れば逃げるに困る四疊半　大阪市五　郎
虫の音がたゞやかましいくらしむき　同
雨止んで風に変つた交叉点　大阪市小　柳
餅が喰いたい言ひつゝアレも死にました　同

母の死

母を燒くけむりよ天へ登れかし　大阪市柳　亭
鳩時計落ちぶれてなほ貴族趣味　同
医者にわ見放され鹹は切られたり　岡山縣梯　梧
黒髪も少さく結んで若く病み　同
ビール一本飲めば事足る上機嫌　愛知縣竹　坊
かたくなの親父雷きらい也　同
兄弟の晝寝向日葵の様に並び　大阪市雁太郎
咥煙草で附いて廻つた盆の僧　同
公園で遇ふて咄しに鳧のつき　奈良縣宇都羅
子沢山紺屋町の夕茜して　同
踏切は馴染へ一寸バーを上げ　大阪市草　右
終電車私は醉つて居ませんよ　大阪市春　雄
容ぼうを償いすぎる健康美　大阪市惠　風
よなべして〳〵やつと娘に晴衣　下関市穂　波
七夕へ西瓜も買へぬスト騒ぎ　大牟田一　葉
母ちやんもハワイ航路をいつか知り　姫路市笑　鬼
口紅をうつして祈るラブレター　岡山縣晋
夕立の用意の傘はおきわすれ　滋賀縣幸　子
杯の持ち様前職思わせる　山口縣水　郷
投賣りへ一冊まじる月遅れ　布施市柏　葉
阿彌陀様坊主もつろうござります　岐阜縣要　兒
ミスポリス小学生にひやかされ　岡山縣智　郎
迷はせるように竝んだ化粧品　池田市木　声
たゝかんと上げしその手に又も蚊の　大阪市詩　朗
結局は野球にとられるラヂオなり　兵庫縣富士子
現実夢も仰げば月一つ布　哇藤太郎

を兼ねている。

この句には「人と鰯は油ひたたれり」や「役人の子はにぎにぎをよく覚え」ほどの社会批判や人生批判はしていない。しかし、たくまない批判がひそんでいる。

川柳には何等拘束がない、非常に入りやすい、入りやすいからとて達しやすいの同義語ではない。川柳はむしろ達しにくい欠点をもつている。安易に作れば、どんな安易な句でも出來る。しかしそれでは五、七、五音をならべたとゆうにすぎない。五、七、五とゆう音律だけではもつているが、それだけではたして散文とえらぶところのない文字を詩とゆうことが出來るだろうか。

五、七、五の音調にほんとの詩を吹きこむためには音調の美とゝもに内音の表現の美を考えなければならない。

内容の美を考えるために先ず問題になるのは一定の限界を考えなければならない。限界には省略の限界、これは表現の限界ともいえよう、これと素材の限界を考えなければならぬ。も一つ必要なのは、作品に対する嚴格な批評である。批判のことは五月号に於て石原氏も指摘していられる。

尚限界に対する吟味は稿をあらためてのべたい。

限界を身につけ批判にたえるためには充分な教養が必要になつてくる。かくて川柳の定石が定まる。あるいわ月並川柳といわれるかもしれないが、それを突破してはじめて生命ある句が創り出される。したがつてこうした秀句は一作家一句を一生にものせば充分であるかもしれない。

盲蛇のおそれないたとえの如く、私も一時は簡單に秀句が出來ると考えたことがあるが、それはあやまりだと氣づき出した。

平凡の中に秀句を創り出す努力、それが川柳修業の要諦なのであろう。したがつて、川柳の研究も平凡句の解剖吟味により大きな意味を見出す。（完）

殘暑御伺
前田伍健
松山市眞砂町二一
（二四七二五）

神泉苑の雨乞

冨士野鞍馬

傘持は神泉苑へかけつける

神泉苑は桓武帝が遷都の直後に造られた禁裏の中の遊園であつた。今でも京都御池通大宮にあり、寺だか神社だか一寸わからないが、池のあることは誰も知つてゐる。「御池通」といふ通路の名称もこの池からつけられたのであろう。

池の中に「善女王社」という社があり、天長年間（西暦八二三年）京師を中心に大旱魃で多くの農民困憊の極であつたので、淳和帝は弘法大師に雨乞祈禱を命ぜられた。弘法大師は勅命をかしこみ、神泉苑の池に臨み、中央に祀れる竜王に対し、眞言の秘法を以て雨乞祈禱の修行をはじめたところ、それが終らないうちに天はかき曇り忽ちにして沛然と大雨になつた。それでこの池を「結成就池」と名づけられたのである。

この弘法大師の雨乞については川柳は詠まれてゐないが小野小町がやはりこの神泉苑で雨乞の歌を詠んだことは多く川柳に詠まれてゐるこの小野小町は七小町とかいろ〳〵に傳説されてゐるが、実際は極めて不確実な話で、兼好法師も「徒然草」に

「小野小町がことまはめてさだかならず、衰へたるさまは玉造といふ書に見えたり。その書清行が書けりといふ説あれど、高野大師の御作の目錄に入れり、大師は承知のはじめにかくれ給へり、小町のさかりなることその後の事にや、なほおぼつかなし」

と述べてゐるように頗るあやしげなことではあるが、とに角時代不明で小町が神泉苑で雨乞の歌を詠んで成功したことになつてゐる。その歌詞は

千早ふる神もみまさば立さわぎ
天の川戸の樞口あけたまへ

であつたが、「新撰狂歌集」のことわりや日の本ならばてりもせめさりとてはまたあめがしたとは

といふ誰の作ともわからぬ狂歌が小町雨乞の歌として俗に傳へられて、川柳もそれを詠んでゐる。

さりとては又といふとさかき曇り
日の本は空までとどく仮名使ひ

ても名歌さりとては又强い雨

歌集にもないことわりや狂歌体

さりとては又とよみてのないお歌

上の句でくもり下の句でぶんまけるし

つぽりと小町も一度雨にぬれ

雨乞はよめど一生身はぬれず

雨に名を残して花の色はさめ

雨乞も袖乞もして名を残し

又靜御前がこの神泉苑で雨乞の舞を舞つたといふことである。壽永元年（西暦一一八二年）の夏、京師は鴨川も桂川も涸れて、市中の井戸も水がなくなつて、百日に余る大旱魃に、後白河上皇は廟議の上百人の白拍子に神泉苑で雨乞の舞を舞はしめられた。その舞姫の百人目が当時十五歳の靜御前であつた。九十九人が順々に舞ひ終り靜が舞始めると、忽ち黑雲が出て四天を塞ぎ雨が降り出して、その雨が三日も続いた。その功で後白河上皇から大嘗祭にお召しになる「蛙螟竜」の御衣を靜に賜つた。この恩賜の御衣は、受人義経を慕つて東國へさすらひ、文治五年（西暦一一八九年）二十二歳で下野國で終命するまで、義経の記念の懐劔と共に肌身を離さなかつたといはれてゐる。それで一説には靜は後白河上皇の御落胤であるとも傳へられてゐる。靜の母は磯の禪師といふ舞妓であるが父は明かでない。高貴の落胤であるので秘されてあつたのかも知れない。百人の内で一人だけ御衣を賜つたといふことでも何か肯ける。それが物語等で後鳥羽院の落胤のように誤傳されて

包めども後鳥羽の院のおとし胤

と川柳にも詠まれてゐる。靜御前雨乞の川柳は見当らないが、靜は自作の歌などから推察すると仲々学問の素養があつたようであるから、凡人の後乱でないと想像出來るのである。

神泉苑では驚に五位の位を賜つた話や、「鵜の丸」といふ名劍を鵜がくわへて天上した傳説もあり、明治時代まで壬生と同じように大念佛——無言の狂言があつたことを覚えてゐる。今度旱魃があつたらこの神泉苑で雨乞川柳会を催したらよいと考へてゐる。

胃酸過多
胃痛・胃潰瘍に…
ノルモザン錠
大阪・武田藥品工業株式會社
45錠入

殘暑御伺
（柳人交欲のページ）

小兒科澤田醫院
沢田四郎作
大阪市西成区玉出本通一丁目十三

大阪市旭区新森小路南三丁目二二
浪玲之介
（本名　後小路幸夫）
電話城東四六四二

平塚市馬入二一九〇九
木村孤浪

川柳料理暦

——秋の巻——

水谷竹荘

「秋刀魚が出れば按摩が引つ込む」

と云諺がある。

之れは九月の末頃から、秋刀魚が漁れだして、そろ〳〵市場に上ぼる様になると、秋の涼しい風が吹き出して、時候も申分なく、從つて人の健康も一際眼立つてよくなるので按摩の御厄介になる人が著しく少なくなることを云つてのけたものであります。

関東ではさんま、関西ではさいら、その他、地方によつて、そざより、さいり、はんどよと言ふ異名があります。

この秋刀魚の外に秋の魚としては、鯵、鯖、鰯、鰤、鱸、太刀魚、沙魚、落鮎、落鰻、等が秋季の魚とされてゐます。

藏宿がかさぬとだぼう沙魚を釣り　（古川柳）

松茸

しかゝ秋の食味の最も代表的のものは、何んと言つても松茸でせう。古川柳から松茸の句を拔いて見ました。

取りもせず娘笑つて稲荷山

茸狩は紅葉狩より世帶じみ

松茸に下女は八百屋へ笑ひこみ

松茸料理は沢山ありますが、その數多い中から、本当の風味ある松茸の香り、味共に満点の日本料理の作り方を申上げます。

松茸は虫のない上物の根先を切り水で洗ひ、水氣を拭いてから、好みの料理にかゝります。埋やきの仕方は洗ひあげた松茸を一本づゝ、美濃紙へ包み、濡らして温灰の中へ入れ、火の通つた頃取出して柚子醤油を添へて出します。又松茸のほうらく蒸の仕方は、ほうらくの下へ塩を平に敷き松葉をしき、その上に松茸を入れ、その外に車海老の頭をとり、春腸を拔きざつと塩茹でにして皮をむき庖丁し、鯛を小さい小串二切塩燒にして、栗を湯をくゞらせて二三個、銀杏を小し塩茹して薄皮を[illegible]き、以上の品をきれいに、ほうらくに並べ、同じほうらくを上にのせてふたをし、下に火を置き、上に火をのせて燒きあげ、柚子を切つて添へて進めます。まだこの外には土瓶むし、酒むし、女夫燒、博多燒、天ぷら、フライ等々、松茸料理には種類が沢山ありますが、作り方は畧します。また松茸の出盛りに家庭でたく松茸めし、松茸うどん等のあることは御存じの事と思ひます。俳句でも

秋もはや松茸めしの名残かな　（子規）

の句があります。

料理屋の栗は違つた味で出る　（竹荘）

栗飯の御馳走になる里帰り　（同）

栗を燒く金縮五人の子の瞳　（文久）

栗は八月中旬頃から出初めますが、九月中旬頃が味が一番よいです。栗の鬼皮をむき、澁皮を庖丁でむき、水を入れてさらし、鍋へとり水を張り燒明ばんを少々入れて火へかけ、沸立つたら一回さらして、又水を張り、余り強くない火で茹で、串を通して工合を見、軟らかになつたら火からおろして水でさらし、鍋へ入れ、余りこゆくない蜜をかふる位に張り、紙蓋をして強くない火で徐々に沸立てゝ火からおろして含ませておきます。これを栗の含煮と申します。

ちかごろ

正本水客

雀の子を十二になる長男が、どこかで貰つてきた。生え揃わない尻をふりながら、ピーピーと疊の上を歩いている。きりぎりすの籠に入れて庭へ吊つてやつた。朝眼がさめてみるとピーチクピーチクと云う声が間違うに聞こえる。一匹の雀が籠のそばまで來ては又ぱつと飛び立つ、暫くすると又やつてくる。氣をつけてみると、そつと警戒しながら小虫のようなものを、くわえてきて籠のなかへ落してやつている。暫くしてまた餌をくわえてきては、パツと飛び立つてゆく。巣から落ちた子雀の本当の親雀が尋ね当てゝきたものであろうか。それとも子を持つた親雀の本能的な母性なんだろうか。こんなことが四五日続いた或る日勤めから帰つてみると雀の声がしない。夕方籠から逃げて行つたんだそうだ。私は何かほつとした氣持で、母雀と一緒に青空のもとへ帰つた子雀のことを思いながら、うかない顔をしている長男に鷄をかつてやることを約束して行水の湯をざぶ〳〵かぶつた。

◎

或る展覽会場で

「御自由にお取り下さい」とあるパンフレットを取ろうとした人が、ふと手を引込めて行つて了つた。何だろうと見ると、その横に

「出品物に手をふれぬこと」

◎

百メートル泳ぐのに何分かゝるのか関心もなかつた人々が十八分十九秒だの四分三十五秒だのと話し合つているのもほゝえましい。フジヤマの飛魚を生んだ日本を見ようと訪日観光團の申込が殺到しつゝあるとは何が幸になるか分らない。ポスターもさくらにゲイシヤガールと云つた古くさい図案に代つて、古橋の水掻きがさつそうと登場してくる。

孔子と八右衛門

福田山雨樓

孔子は今から二四二八年前、柄井八右衛門は一五九年前、何れも七十三才で歿してゐる。共通点は只それだけである。でも同じ年で死んだと思うと何かしら親しみが感じられるものである。だが自分が今だしぬけに聖人と点者とを並べたのは、徒らに過去帳を繰ろうとするものではない。孔子の時代は日本で云えば第四代いとく天皇の頃であるが、之に関する文獻はかなり詳しく傳わつてゐる。少にして父を喪い、青年時代に母と死別し、孤独貧窮のうちに人となつたことから、修学、仕官、放浪、歴遊、教授、著書等その傳記は支

この外金とんや燒栗、栗飯などは喜こばれる料理です。

鯵

夕鯵は丸提灯で選つて買ひ　（古川柳）

鯵の声日も精進も落ちる頃　（同）

小鯵は夏ですが秋になると、油の乘つた大きな鯵がとれます。白燒にしてほぐし、野菜サラダといつしよに、マヨネーズであえて、たべるのも、うまいです。

蛸

竜宮の弔ひ蛸が導師なり　（古川柳）

竜宮の門番グニヤリ〳〵と出　（同）

竜宮で蛸足力の店を出し　（同）

眞蛸も秋近い夏から中秋へかけて頭瓶の頂辺に卵を持ちます。眞蛸の卵はイイタコの卵粒より遙かに微細で薄い卵嚢に包まれ鷄卵の黄味を大きくしたような卵黄色の円い形の大きい卵である。卵粒は一個八万粒及至十万粒を包藏してゐます。一般にこれを蛸の卵と云はずして蛸の子と称してゐます。

蛸の子は蛸の頭瓶の半以上の大きさになり、一個の重さ凡四五十匁位にまでなります。初秋の頃二三七匁位の爛熟期前のものが尤も美味な時で、舌に溶けこむような旨さで、さわやかな涼味を感じる秋に相應しい佳味を有しています。この蛸の子の味は、鯛の子や蟹の子、飲蛸のいゝ等、風味の良い卵子は、あつても、蛸の子には及びません。蛸の子を煮くには卵子の潰れぬやうに半紙で包んだまゝ二十分許り湯煮して後、水氣を切り、酒、醤油、砂糖で味をつけ、程よく切つて、小芋か白瓜とたき合せて出します。又蛸の子を味付にして焚き上げたものに、味をもつこの蛸の子を夕餉の一餐に十万疋の蛸坊主の素を一口に入れて、食べるのは、痛快な事ではありませんでせうか。

處女鑑別

（ハガキ隨筆）

浅田右聞

門口で医者と親子が待つているという古川柳の解釈は色々にされている。中條に姙婦がはいつて手術を受けている間、紹介した医者と親子と待つているという説はどうもピンと來ない。医者の内診だという説がある。そんな医者の専門の而も極めて限られた事を一般的な川柳に読むわけがあるまい。之は誰でもがすることで指二本を中へ入れるのをさしているのだと思う。（探闚チギタチオ）親指、子指、薬指は中にはいれないからである。法医の方では二本はいるのは已に処女でないと見る。処女では一本も辛じてはいる位である。

―東京都法医学博士―

蒡を溶いて入れてあんかけにしても美味しく頂けます。其他湯煮した蛸の子をバラにしてほぐし、玉子の白味だけに蛸の子を混ぜ合せうす味をつけ蒸しかためたものを切つて、吸物の種としても至極上品なものです。初秋の珍味として絶対に見のがせぬ尤物で、優雅な

鯛

武部香林選

鯛

鯛買つて帰れば妻を驚ろかせ　庸司

翌朝のお菜にもする浜の鯛　万年

眼の下をほめて鯛にも社交性　孤風

裏口の鯛へ女中も慣れてゐる　斗四翁

病む母に見舞の鯛を見せてあげ　孤峰

到來の鯛を家内はもてあまし　浩

仲人と鯛が目出度い色にさせ　鮎美

朝からの鯛海近い宿の風　白溪子

苦労した鯛かこゝにも節があり　葉光

鯛のかしら良人につけて向う膳　弓削平

竜宮で育つたやうな鯛の色　草々

佳・袖の下鯛は代々相勤め　旅風

佳・燒鯛にしてにらんでる二三日　鮎美

佳・鯛買つて帰る女は犬を連れ　湖月

佳・鯛の鯛夫婦子のない話する　水客

佳・そり鯛を屏風でかこはずかし　華水

人・無造作に役人なれば鯛も食ひ　斗四翁

役柄に似合はぬ鯛が届けられ　孤峰

地・吉日の鯛俎板に尾を余し　水客

たまさかの鯛を小猫に取られたり　滝啾

天・鯛の目をつゝき二号にある不平　香林

よろこびの鯛は値切らず買て行き　五郎

軸・無理をして弟子の祝つた鯛に泣き

（課題吟）

那の歴代に十五六種に上つてゐる。一方川柳翁の傳は簡素寥々、亡羊の歎豈史家のみならんや、である。しかし彼が心血をそそいだであろう万句合の選評は、更に精選を遂げて柳樽二十四篇としてわれらの手中にある。翁をしり翁を語るにはこの古典を寿かにして、類推帰納をはかるの外はない。論語の参考書目には古義、標註、徴考、徴集覧、古訓、筆記、繹解、集解故異、語由、述志、大疏、欄外書、古傳、撮解、考文、題修、通解、訓蒙輯疏、集説等和漢を通じて、その多種多様なるに一驚を喫するのであるが、古川柳の解明に志を等うするものは、之に鑑みて一層の学問的努力を傾注しなくてはならぬ。圓病冬閑論語解義を読んで感あり。

ビヤホール
みどり
上六交叉点角西北

廻つたものです。

葱

玉葱に涙悲しい訳でなし　（紫陽花）

葱は種類も色々ありますが、いずれも滋養分は少くないです。しかし副食物としてはスコブル調法なものでありまして鳥や肉のようなものを調理いたします場合にはきつと葱がいります。これは葱の揮発性によりまして、肉類の臭氣を消しますし、そればかりでなくすじのありませぬ肉類ばかり食べますと、どうしても便秘のおそれが御座ゐますから、すじの沢山な葱のやうなものといつしよに食しますと、調和が取れるからであります。それから葱は不消化ではありますが、身体を温るのにきき目がありますから感冒をひいたときや、肺病の人などが、葱のおじやを温かくして喰るなどはまことに結構な事であります。また葱は腦の強壯剤となるとも言はれております。頭痛の時など、葱の白根と古生姜のきざんだのを煎じ出して、その汁を飲むか、その葉の中にある粘液を塗布すると癒るものです。玉葱は枕元に置くと不眠症をなをし安眠を得さしめるといわれてゐます。

柿

柿葉ちる音に思索の夜がくづれ　（方一）

古川柳の中の柿の句を拔いて見ます。

よく見れば手の届くだけ濃い柿

御所柿へ枚を衝んで夜討をじ

乳母同志対決にする柿一つ

命日に祕藏の柿をとりはじめ

柿の皮かうむくものとたつて見せ

さればこそ人の候柿のかげ

柿は酒毒を消しますので妙です。俗に柿を喰べて酒を飲ますといくら飲んでも酔はないと申しますがそうかも知れません。それにつるし柿は、痰を切りますし、咳嗽を止めるのにきゝめがあります。蛇にかまれたときは、串柿をいぶしますが、ないしは溢汗を煎じたのを貼付いたしますと、そうした毒を消すものです柿のへたはシヤツクリの妙薬であります。それには柿のへた八個に水一合を入れまして、それを三分の二に煎じつめますので、これを度々飲ませるのであります。

枝豆

枝豆は旦那の顔へつつばじけ　（古川柳）

枝豆は、枝からもぎ、後先を鋏で淺く切りよく水洗ひして、よく煮え上つた湯の中へ塩とタンサンを一寸入れて茄で、笊へあげて又塩をふり、うちわであをいでさまします。

柚子

急な客柚味噌の蓋をちよいとそぎ　（古川柳）

柚子の使ひ方は色々あります。柚味噌は、田樂によろしいし、又柚子は吸物に、又煮物や旨煮に使ひますと、その薫りのよいのを喜こばれます。この外に柑かまと云つて揃ひの柚子、葉付なれば猶よろしい、葉付の方を七三の三分にして切り、中身を拔いて、酢の物煮物などを盛り、蓋をして用います。この外柚子は料理の加役として使途がひろいです。

唐辛子

唐辛子からいといふにそれ見たか　（古川柳）

唐辛子なんにもいはずすつと立ち　（同）

唐辛子は油を塗つて、焼いて、出汁をかけて、そのまゝ酒のつまみになりますが、天ぷらにしてもよいし、佃煮にして置くと、弁当のおかずに喜こばれます。

すつぽん

すつぽんの名は飛び込んだ時につけ　（古川柳）

すつぽん料理は非常に滋養分にとんでおります。すつぽんの甲羅を鍋にしてたく、すき焼の味は、食通だけが知つてゐるぜいたくな料理です。又〇吸と云つて、白髪葱と、露生姜で味う、すつぽんの吸物は、代表的の一つです。この外に生血は、神経衰弱や貧血病の人によくきく事は有名です。

社の黒板

▼「不朽洞会から」の原稿が、印刷所から空に消えたので大いに弱つた。もう一度同じものが書けないので、不朽洞会一ケ月間の消息はブランクのままで見逃ることとした。あしからず御諒承願いたい。▼今回、我が社では、北極星三階に、なんば連絡所を設けた。正午から六時まで出向いているので、附近へお越しの際は是非お立寄りが願いたい。句会以外にも出來るだけ顔を合はして柳談に花を咲かそうと云う訳である。但し、日曜日と、祭日と毎月十三日は連絡所へは顔を出さないことになつているので、お含みを乞う。まだなんば連絡所開設の御案内も刷れてないのに、奈良縣から上田翠光氏、東京から高須啞三味氏、つい鼻の先の道頓堀から脇田梅子さんのお使と云つた風に続々と來訪、これは便利だと大変よろこばれている。

山之内
血圧降下に
アークレミン
定剤
注射
血管アウトホルモンとアミン塩類
山之内製薬

いのちある句を創れ

花地物語

投稿清規 ▼用紙は原稿用紙▼文字を正確▼開催月日及場所記入▼締切毎月廿五日▼投稿先本社宛

本社八月例會

八月七日 午後一時
於大宝文化会館

河岸に沿うた三階の窓からいつもよく風が這入るのに今日はそよともしない暑い日、しかも日盛りに作句熱の旺盛な人たちが集つた。路郎主幹は柳詰に熱弁を揮はれ、鮎美氏の句評は止むなき欠席のため、プリントの配布によつて紫香氏が代読された。句会後、生々庵氏の提案で臨時不朽洞会が開催された（幹事）

出席者＝路郎・默平・錦風・笛生・緑雨・紫香・正司・芦穂・文雄・古方・春草・青丹子・昌々子・白柳子・愛論・淡舟・香林・旅風・竹莊・沒食子・晩鳥・小松園・玲之介・柳亭・生々庵・葭乃・梨里

兼題「ビヤホール」　麻生路郎選

大ジョッキ二杯で人生観変る　春巣
ビヤホール雀のやうに仲がよし　香林
ビヤホール男同志の意氣が合ひ　同
ボスに連れられてビヤホール暑い也　白柳子
社会主義まだ拔り切れずビヤホール　葉光
卷き舌をなだめて帰るビヤホール　愛論
胸襟を開き課長とビヤホール　同
且那より二号がつよいビヤホール　竹莊
汗臭いシヤツで廻つたビヤホール　沒食子
生きて居た甲斐のひとつにビヤホール　旅風
地下室に天國があり大ジョッキ　斗四翁
ビヤホール出てから先の氣が変り　春草
ビヤホール弁当が忘れられ　文雄
大コップかなわぬ恋の泡を飲み　鮎美
ビヤホール扇子片手は呑みたらず　緑雨
約束を忘れてしもたビヤホール　淡舟
ビヤホール横目で通る借りが出來　錦風
「賣切」を貼つて靜かなビヤホール　竹莊
おゝそこに生きてゐたかとビヤホール　香林
金の事言ふな〳〵とビヤホール　錦風
兒を抱いて來てビヤホール無事に醉ひ　柳亭
ビヤホールの裏はごた〳〵した住ひ　青丹子

兼題「海水浴」　菊沢小松園選

貸別莊から海水浴へ派手に出る　芦穂
つれて來た女中の方がよく泳ぎ　竹莊
想ひ出の涙へ二人で來て泳ぎ　沒食子
手術した跡を海水浴でみせ　白柳子
一日を悔で過ごした肌の色　笛生
海水浴ふたりのものとなるボート　紫香
沖へ漕ぐボート帰りは泳いで來　鮎美
海水浴の時間もみさくスケジュール　古方
浮袋やつぱり恐い波がしら　柳亭
恋愛をビーチパラソルでも論じ　葉光
およがせてよろこぶ父もやけてくる　緑雨
恋すればこそ涙寺の砂に焦げ　白柳子
このように泳ぐんですと海月浮く　春草
海水着自信は男に手傳はせ　小松園
晝寢していても嫁のつゝましゝ　香林
寄り添つて乳房を掴む晝寢の子　同
今一度晝寢を起す声を出し　錦風
集金に晝寢の首の向を変へ　小松園
ガラ〳〵が一つひるねの枕もと　愛論
夜業した父の晝寢を起すまい　淡舟
孤兒の晝寢の夢は母に会ひ　玲之介
主人には済まぬ晝寢を小さく寢る　默平
洋糸の趣味を晝寢はうるさがり　竹莊

席題「撒水車」　市場沒食子選

徹水車水一線の問屋街　文雄
スケートにのる兒を叱る撒水車　白柳子
ハイヒールが素早避けた撒水車　芦穂
白服をうつかりぬらす撒水車　香林
復員を待つ身老父の撒水車　錦風
アベックを追越して行く撒水車　竹莊
盛場をゆつくりと行く撒水車　同
撒水車恋の二人をわかれさせ　青丹子
撒水車いつものとこで向きを変へ　小松園
撒水車足がもつれたニユールツグ　柳亭
アスファルト解ける舗道を撒水車　春巣
撒水車撒いてしまふと雨になり　正司
撒水車水出したまゝジープよけ　昌々子
面白く橋筋を行く撒水車　愛論
いち悪の奏でいそぐ撒水車　沒食子

兼題「晝寢」　水谷竹莊選

獅子舞へ晝寢の母も起きてくる　青丹子
二人とも晝寢してゐる若夫婦　錦風
貧しくも晝寢の出來る家があり　柳亭
ベートーベンに晝寢の夢を起される　白柳子
吉報に晝寢の夫ゆりおこし　正司
蠅追ひに來たまゝ母もする晝寢　紫香
晝寢から醒めて稼業の紅をさし　正司
無意識で晝寢は腕の蚊をたゝき　沒食子
信用は晝寢の枕すゝめられ　小松園
添乳したまゝで晝寢の若い母　沒食子
追放になつて晝寢の癖がつき　芦穂
兒がはうてゐるのにマゝは寢てしまい　鮎美
二三匹の蠅がうるさい晝寢なり　淡舟
長屋の人に晝寢の時刻が過ぎ　默平

席題「河鹿」　戸田古方選

世を捨てゝ悔いず河鹿の村に住む　玲之介
保津下る舟やり過ごし啼く河鹿　旅風
河鹿聞く避暑地へ作家行つたまゝ　春草
燈籠の庭で河鹿の声を聽き　淡舟
夕立へ河鹿の声のひとしきり　同
倖せはてすりに添つて河鹿きく　正司
出養生河鹿のことも書き添へる　沒食子
この辺り河鹿に鳴かれ立ち止り　晩鳥
世渡りに疲れ河鹿を飼ひ慣らし　小松園
右に往き左うかゞう河鹿の音　旅風
河鹿とり卷いてもう啼くか〳〵　愛論
河鹿鳴く岩へ降り立つ貸浴衣　白柳子
二号さん連れて河鹿を買ふ夜店　青丹子
ポーターブルかけて河鹿の声を消し　淡舟
河鹿鳴く里まで逃げて氣が変り　正司
酒はもう澁茶がうまい河鹿の音　玲之介
河鹿なく河原でブトに喰はれたり　古方

席題「怪談」　互選

怪談をはしつこで聞く娘の子　紫香
怪談としてほつとけぬ職をもち　古方
怪談の席起ちかねる小さい意地　旅風
怪談の夜から便所に連れが要り　默平
怪談を聞いた戻りに下駄が切れ　紫香
怪談に娘同志は肩を寄せ　芦穂
怪談を生娘らしい型で聞き　晩鳥
怪談が次々つゞく社会面　正司
怪談へビックリさせた子の花火　沒食子

雜川

北大阪支部句會（大阪市）

六月十一日
於十三阪急保線宿直室

十八番・毛虫・けちん坊
山の道・主婦・泡

立膝になつて昔のおはこ出る　水客
賞められて十八番だんれと惡ひれず　万滴
十八番出すだけ出さで醉ひつぶれ　紫香
ごいん居に毛虫をころす用があり　美奈子
毛虫或る日緑の風に搖られてゐ　香林
そよ風に毛虫ブランコする如く　案山子
夕立へ毛虫もあわてまいことか　鮎美

阪田謄寫版

大阪市北区芝田町五二

株式会社 阪田商会

電話 福島一六三九番

女学生の列毛虫のとこで曲つてる　万滴
驚かぬ様に毛虫を取つてやり　修三
泣いている肩とは毛虫知らぬなり　水客
いろ〳〵と理くつのうまいけちん坊　修三
けちんぼが札よみなほしよみなほし　春柳
のむ話出てけちん坊は逃げかへる　更生
けちん坊税金に氣が変になり　豆秋
けちん坊それで案外義理固く　万滴
ハイキングでんやわんやが歩むなり　春柳
山奥に人住めるらし電話線　香林
氣の合つた同志くつつく登坂　修三
峠もう次の部落の風になり　紫香
主婦の寝言に月給はまだですか　豆秋
酒癖になれ主婦としてつゝがなし　紫香
主婦日記子等が寝ついた後で書き　万滴
主婦として代議士として化粧する　香林
泡立をゆつくりみせて石鹸屋　里十九
生きている証拠に蟹の泡うごく　水客
連絡船の泡追ひかけて來る「いるか」　譲

七月九日

ぬれねずみ・鹿・尺八・渡船
裸・命・旅

玄関で母を呼んでる濡れ鼠　博也
居た所一寸云へないぬれねずみ　茂
鹿の眼になにを見てゐる秋の草　案山子
静かさへ鹿は動かうともしない　青丹子
尺八を器用に吹いて美眼なり　案山子
遠慮なく尺八をふく二階借り　紫香
強盗へ尺八持つて向はむか　鮎美
曳船えヒヤ〳〵さした渡船　香林
渡船最初はあらぬ方へ向き　花村
両方が結婚資金的にする　修三
腹這へばおへそへ砂の暖かさ　万滴
のうれんの端を押へて言ふ裸　默平
まあ上がれ上がれと社長裸なり　豆秋
若死の亡友は裸で写つて居　鮎美
そうめんがツルリとうまいまつ裸　豆秋
大病のそれから命大事がり　博也
子の命医者に預けた顔で出る　青丹子
エイブチリのみのいのちのはかなさよ　万滴
電線へ安い命が引つかゝり　默平
友シベリヤより帰還

すさましき命をさげて友かへる　博也
ツーリストビューローへ來る社の用事　案山子
旅費つきるとこまで二人行くつもり　博也
花嫁が寂しくなつた旅の宿　潮花
山の兒に手をふつて見る汽車の旅　紫香
旅心勘定書でこわされる　修三
千円で何処まで行ける旅行地図　案山子
旅の雨暫く女中が話しに來　紫香
旅更けて波も聞えぬほどになり　水客

雑川　**東京支部句會**（東京都）

七月十七日　於　島野寮

幽霊・夕涼み・水泳

幽霊が足を組んでる樂屋裏　白星

本社句会は

十月一日（土）午後六時

大阪市南区鰻谷仲之町六八
大宝文化会館

兼題　「背廣」　「誘惑」
「沿線」　各三句

柳話　廃生路郎　**句評**　水谷鮎美

幽霊のやうに衰へ女病み　高志
此の怨晴らさでおくかと死んだきり　好郎
一わたり女の噂夕涼み　ひろし
夕涼みしてはおられぬ手内職　好郎
父までが花火に交る夕涼み　東夢
夕涼み女房は下駄を叱りに來　白星
新記録成るかしぶきに息を呑み　高志
抜手切る子は古橋につゞく意氣　好郎
鍵かけてゆすつてもみる金庫番　圭三
びんと鍵かけて看守のふと淋し　白星

旅の宿水の音まで書いてやり　良子
水蓮の色をとかして水暮れる　定美
アマチュアのバンドに過ぎた大太鼓　英一
かば焼の儲は知らぬ澁團扇　呑水
團扇もう動いてゐない二人づれ　鳩花
蚊帳の子も寝たか團扇の音もなし　潮花
駅の灯で社説も読んだ待ちぼうけ　鼓愁
夕涼み未來の夢に君とゐる　競花
寝そびれた人もまた來た夕涼み　月都
夕涼みもう年頃の帶をしめ　秋花
母の顔ながめてすがる乳房なり　穂甫
父憎む日もある母と住み馴れて　潮花
盲目な愛も嬉しく母と寝る　定美
人知れず溜息をつく恋と知り　雄一
初恋の胸の痛みがまだ消えず　鳩花
初恋の窓は灯りがまだともり　呑水

雑川　**日立櫻島支部句會**（大阪市）

水・太鼓・團扇・灯・夕涼み
母・初恋・舟・花火

そむかれて去る故郷の水清し　月都
水さしへ今日会ふ水をかへ　鼓愁

雑川　**出雲支部句會**（出雲市）

七月十九日　於商工会議所
尼　綠　之　助　報

茄子・声・ライター・謎・夏の夜

先週からずつと茄子だと一人者　孝弘
一坪の園藝茄子を王座とす　へとち
捨苗のこれは意外な茄子が出來　虹路
ポツリ〳〵と恋となる声よ　綠之助
理があつて敗けない声なる次男　綠之助
千持無沙汰に光つてゐるライター　さわだ
安物ライターにさへ思ひ出が　吉郎
ライターも無用ですよ病みあがり　笑郎
謎かけた娘を一寸とみなほした　孝弘
結婚をすれば女の謎もとけ　吉郎
謎として妻の心を許すなり　さわだ
へちゑ未だ若く夕の景となり　綠之助
恋とは恋とは夏の夜風にあるものか　同
不意の客一つの蚊帳で氣兼ねなく　へとち

雑川　**大牟田支部句會**（大牟田市）

七月廿日於三池染料保安課
富　田　一　葉　報

異動・梅雨晴れ・香水・満腹

異動した後もやぱり女秘書　十四之

異動宴もう酒癖が知れわたり　抱逸
皮張りの椅子が後から來る異動　つれ夫
うつむいて異動淋しく引受ける　亀水
梅雨晴れの野球外野はよくとろび　十四之
梅雨晴れてホット警備の氣がゆるみ　充
梅雨晴れへ物干竿の短か過ぎ　十四之
二本目の傘を質はして梅雨が晴れ　亀
華やかに秘書香水をまさちらし　つれ夫
約束の時間へ香水振つて出る　十四之
満腹へ燭がついたはおそ過ぎる　抱逸
腹一ぱいですとは遠慮した瞳　水泡

雑川　**竹原支部句會**（廣島縣）

六月十九日　於可笑居

草・母・水

雑草の中に忠魂碑忘れられ　芳郎
新しい母に末つ子もう甘え　同
打水へもう珍客の來る時分　同
草笛もおぼへて疎開の子は元氣　柳慶
今日迄の苦労母親の手のあつみ　同
撒水へ犬シブ〳〵と起き上り　葉留路
草に寝て物を思へば雲が飛ぶ　可笑
行く水に若き思ひ出たぐるなり　同

まゝ母さと云われたくない氣の疲れ　芳泉
せわしない浮世を他所に水車　同
ハイキング谷間の水（皆はしゃぎ　柳慶
母親の願は一つ復らぬ子　愛鳩
御話は上手に水を向けてくる　同
生きぬかん力も強し線路草　葉留路
草ぼうゝ税金になやむ土地　同
母だけが着物で交るハイキング　同
新婚の隅で初恋死んでゐる　春月
初恋の彼も彼女も死ぬと言ふ　秋花
初恋はブラトニックではかさず　繁穂
大胆な初恋となる嫁きおくれ　呑水
まだ母の言葉がこわい恋なりき　潮花
夕焼へお茶がふいてる舟世帯　定美
靴さげて愉快に乗つた筏舟　良子
舟の中涼しく女だけ坐り　呑水
わが恋の仇花に似て花火散る　鼓愁
打ちあげた花火ビルまで染めて消え　潮花
ひとり來て立てば花火の輪もさみし

白鷺川柳會（姫路市）

七月三日夜　於樹甫居　燕子報

帽子・蚊帳

ビヤホール僕は帽子を忘れて來　燕子

ジャングルの恋書見て來たヘルメット　凡樹
まつさらの帽子ちよつと照れている　夫甫
珍客へ蚊帳を外して出碁盤　一笑
色褪せた蚊帳亡き祖母の懐しき　燕子
珍客も一つ蚊帳なりわび住居　樹甫
復員の嬉しいものに麻の蚊帳　一葉
明け放つ二階のかやの涼しそう　二葉

尼崎小集（尼崎市）

七月十八日　於忠八居

シャツ・三人・食糧・つかみ合ひ

臍・マッチ

よれ〳〵のシャツで政府をこきおろし　正司
三人はもうあぐらなり儲けて居　鮎美
三人までは里から祝が來　正司
三人の財布いづれもたよりなし　忠八
食糧難社長も同じ思ひで居　鮎美
食糧は心配ないと連れて行き　忠八
つかみ合男の写眞ひつたくり　正司
あの人があんな顔してつかみ合ひ　忠八
ライターとマッチマッチが勝ちました　正司
込入つた話マッチで耳をかき　鮎美
此頃の根城マッチで知れるなり　正司
臍見せて納涼電車氣分出し　忠八
裸の子臍に西瓜の種をつけ　忠八

千[illegible]社句會（貝塚市）

帶・氷・雜吟

初孫も出來緩やかな帶に馴れ　庸司
解き捨てた帶がみだらな青疊　康彦
とけて行く氷え命おしはかる　稔一
ブッカキに十五の淡き恋心　一郎
キャンデー屋一本だけは子え残し　伊津美
女同志きつちり勘定して別れ　周太郎

川柳さつき句會（滋賀縣）

七月九日　於美秋居

海・虹・金魚・デモ

甲羅干すだけの水着が目を集め　美秋
夏が來た海へ行かればそんの様　斗志
泳げないのを口実に断はられ　忠一
おいないと呼んでゐるに虹が消え　幸子
子に虹を見ろと支関父帰る　春巣
初孫へ金魚をすくう夜店の灯　美秋
應接の金魚目の目が見たくなり　春巣
デモ行進てんやわんやに通り過ぎ　幸子
幼稚園デモの眞似して手におへず　同
首の心配ないのがデモの前に立ち　春巣

岸男前製造所小集（大阪市）

七月二十五日　於南柳居

親・顔・松明・傘の内

強慾なとこが親爺にそつくり似　大研子
夏祭親は裸でもいゝが　豆秋
親としてダンスも理解せなならぬ　同
税金へ親も腐れば子も腐り　沒食子
そゝり立つ山の如くに父默す　香林
沈默のうちにも顔がものを言ひ　同
そのかみの同ざれ顔も皺だらけ　豆秋
下役を引きつれ顔が呑みにくる　同
氣に喰はぬ顔の向ひへ坐らされ　小松園
顔貸してくれとはアロハ古い也　白柳子
つい立へ顔だけ出した素ッ裸　同
呑んだ顔呑まない顔に支へられ　沒食子
夕立は遂に顔だけ剃つてゆき　南柳
佛顔してゐたんでは食へません　豆秋
親の顔子の顔明日を期して寝る　沒食子
顔立てゝやるのにやはり酒がいり　豆秋
傘の内鼻緒の切れたのを連れて　同
忘れもの傘の内から声をかけ　小松園
傘の内今日の割前もめている　豆秋
顔見ればさはぎにもなし傘の内　路郎
年下と寄り添うて行く傘の内　同
いれづみの腕に寄り添う傘の内　同

―動靜―

▼本社八月例会七日午後一時から南区鰻谷伊ノ町の大宝文化会館三階大廣間で開催された▼用雜北支部では八月十四日午前九時から箕面で納涼川柳会を開催、午後から会場滝安寺で講演に作句に欲を盡くし薄暮散会した▼大阪警察病院茨本分院用柳会は八月十二日午後一時から同院大食堂で開催▼大阪逓信病院川柳会は八月十三日午後二時から三階図書室で開催▼南区医師会文化部川柳会は八月十六日午後七時半から大宝文化会館で開催▼南海電鉄川柳会は八月廿六日五時十分から南海ビル屋上娯樂室で開催南柳居小集（大阪市）が七月廿五日午后五時から開催された。以上何れも路郎主幹出席▼川雜出雲支部は七月十九日夜商工会議所で開催された▼岡山縣人の句集「吉備團子」刊行記念句会が八月十三日、岡山市の禁酒会館で開催された▲月原宵明氏送別句会（今治市）が高知へ栄轉される宵明氏のため八月十九日文庫曉童氏等によつて文庫居で催された▼「川柳大阪」は橋本絲雨氏の交通局を勇退と共に、富岡淡舟氏が編輯発行人として継承されることとなつた絲雨氏今後、大阪市交通局川柳会の顧問に推された▼「鳥巣句集」が七月一日淡路洲本市紺屋町佐々木博子氏によつて編輯発行された四六横袋綴六四ページ謄写印刷非賣品▼岡山縣川柳人句集「吉備團子」第一集が八月一日岡山縣和氣郡吉永町福瀟浜田久米雄氏の手によつて刊行された巻頭に麻生路郎主幹の「序」と福田山雨楼氏の「岡山縣と川柳」がある。四六版六〇ページ、岡山縣川柳人四十五名の川柳集で岡山縣の川柳界をパーズアイ出來る。非賣品ではあるが望希者へは價五十円送費六円で頒つとのこと川柳雜誌社でもお取次ぎする長宗白鬼氏（兵庫縣）の來信によると、大鉄川柳も発刊一週年を迎へ各局と私鉄の川柳人を包含して鉄道人川柳聯盟と発展的解消をして機関紙も「焚火」と題して九月から新発足をすることになつたとのこと▲堀口塊人氏は西宮市高木石訳町三二へ轉居された▼福井哲氏（京都府）大河原に引込んでからもう七年目の夏を迎えられるとのこと、魚釣と畑仕事で銅色の健康。夜は村の人たちと囲碁で退屈のない日を過していられる由、又鶏八羽と兎十頭の世話をして多忙だとのこと、往年の本社の写眞部長の悠々自適ぶりを一寸発表しておこう▼西野斗四翁氏（八代市）は最近作句意欲が旺盛で雜誌の課題吟位では我慢が出來んと本社句会の兼題にきで進出される多作ぶりだ。全國作家も彼氏に続くやう努力されたい▼梅川不二烏氏（堺）は昌木子と改号▼本庄快哉氏（松江市）の來信では川雜支部関係柳城社同人中には大火の被害はなかつたが番傘関係の大鳥、舞吉、柳水三氏の宅及び柳城社例会場の永泉寺と恩敬寺の二寺が全焼したと。

高級化粧料容器には勿論！
ヤマキンの……
黒硝子
大阪市大安區長柳町
西通一丁目四四
山銀株式會社
電話堀川四四七番

編輯室にて

▼秋立つ——とは云ひながら、暑さは少しも減じない。裸で編輯してゐても、ボタボタ汗が机上に落ちる。しかしよりよき編輯には汗が唯一の味方である。▼前号も好評だつた。この上の御べんたつが願ひたい。▼岩田清画伯を煩はした本号の表紙「甘藷ととうがらし」は写生の眞髄を突くと共に、どッかにユーモラスな味があつてうれしい。▼堀口塊人氏は「仮名づかい其他」を寄せられた。DやTの創字説などうなづかせられる▼冨士野鞍馬氏は「神泉苑の雨乞を」執筆、氏の畑を一ト筋に歩まれる尊い文字である。▼戸田古方氏は「近代文学としての川柳」を寄稿、川柳忌を前に斯うした啓蒙記事を発表することも無意義ではなからう。▼水谷竹荘氏は「川柳料理暦」秋の巻を発表された。これは料理を中心に書かれた軽い読み物である。▼築山快夢起氏の「同姓受難物語」はハワイタイムスに書かれたものであるが、本誌に関係があるので轉載することにした。▼寛政二年の九月廿三日に初代川柳柄井八右衛門が歿してから今年で恰度百六十年になる。川柳忌は九月廿三日ではあるが、これは旧暦をそのまゝ新暦で修してゐるので正確な忌日だとは云へないが、明治以來の習慣を継承してゐるのである。我が社では社の都合で、本年は九月三日に繰上げて修することにした。▼柳祖は江戸浅草の竜宝寺門前町で出れたのであるが、年限の淺い割に、詳傳が傳はつてゐない。東都の柳人によつてこの方面の研究をもつと盛んにして欲しいものである。

★

▼沢田四郎作博士が突然編輯室を叩かれた。博士の近著「異國より帰りて」を上梓されたので自ら持つて來て下さつたのである。博士が軍医として満鮮に従軍中、余暇に研究された民俗学的、考古学的報告と、シベリアに俘虜生活をされた尊い記録で埋められてある。博士が辞去されてから直ちにページを繰つた。かなり長い「まへがき」がある。それを默読した私の頬には涙が流れてゐた。翌日妻子を集めて、もう一度同じとこを読んで聞かせた時には、涙がボタリボタリ本の上に落ちた。こんなことははじめての経驗である。しかし、内容は涙を誘うていのものではない。何処までも学者としての博士の冷静な観察であり、報告である。昔から戦爭のきらいな、猫の好きなこの著者の「異國より帰りて」を本誌の読者も一読して欲しい。非賣品ではあるが、実費（一〇〇円）でお願ひすれば頒けて下さらぬこともあるまい。望者は私まで申込まれたい。

★

▼私は從來、ムヤミに投句をすゝめない方針で來た。作句と云うことは何処までも自発的なもので他人からすゝめられて作る程度の作品はしれたものである。止むにやまれぬこころから、作句した作品なら、敢えてこちらから投句をすゝめなくてもすゝんで投句されるものである。從つて作りたい人は大いに作れ、作れない人は大いに読めと云う態度でのぞんで來たのである。本誌が他のやうに、読者即投句家でない理由がそこにあるのである。▼読者は何処までも読者であつていゝ筈のものである。他人の詠んだ句を樂しんで読み続け得られる境遇にある人は幸福である。▼しかし、そんな読者がいつのほどにか作家になつてゐられるのを発見することがある。そんな作家の作品は作らずにはゐられない衝動によつての作品だけに、表現技巧は拙くてもどつかに特異性を露出してゐるので將來に期待が持てる。▼本誌の発行日を早めるために、締切日を待たずにドシ〳〵投句されたい。当分來たとこ勝負で出してゆく積りである。御協力を乞う。（路）

趣味と教養の殿堂

松坂文化クラブ

會員募集

課目

華道（小原流・宋生流）
茶道（表千家流・宗偏流・花月庵流）
洋裁・書道・日本畫
箏曲・聲樂
手藝・古典・新舞踊
長唄・小唄・謠曲
服飾デザイン

詳細お問合せは
七階文化クラブ事務所へ

松坂屋
大阪日本橋
電南一一七一番

シマズに　ヨクキク

大學目藥

結膜炎
トラホーム
つかれ目

15cc 正價¥30

㈱天賞製藥

Made in occupied Japan

B列5号　毎月一回一日発行

川柳雜誌　第四卷　第八号

一冊　金三〇円（送料三円）

（轉載禁）

半ケ年概算　金一九八円
一ケ年概算　金三九六円

昭和廿四年八月廿五日印刷
昭和廿四年九月一日発行

大阪市住吉區万代西五丁目二五番地
編輯兼發行人　麻生幸二郎

大阪市住吉區万代西五丁目二五番地
発行所　川柳雜誌社

振替口座　大阪七五〇五〇

募集

課題吟募集

自轉車（十句）川村好郎選（十月五日締切）
代理（十句）大鶴喜由選（十一月五日締切）

毎号募集

近作柳樽（雜詠廿句）麻生路郎選
川柳塔（雜詠）麻生路郎選
文章（評論・研究・感想其他）

投稿規定

▼投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
▼『近作柳樽』は一般作家の雜吟を募る。
▼『課題吟』は何人でも投句が出來る。
▼『川柳塔』への投句は不朽洞会員に限る。